Language,Blood and Milk : L'Ecriture and the Body in Beloved (II)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/991

言語、血、ミルク--*Beloved*におけるエクリチュールと身体性(II)

和　泉　邦　子

マリアンヌ・ハーシュは、『母と娘の物語』の序論で、我々の考えている「母性」概念自体がいかにある歴史的要請によって発明されたイデオロギーであるかとの要素を強調した上で、1970年代と80年代の欧米のフェミニズム的伝統は、男の筋書きの中に女独自の筋書きを刻み込むことには成功したが、それはひとえに女の経験とアイデンティティの一つの局面--母親的なもの--を、さらに沈黙させるという方策によってであったとする。[1]欧米のフェミニズム理論の中でも特に伝統的な核家族構造を分析の大前提としている精神分析的枠組みは、根本的に一人前の人間になっていく過程を個人主義的に、さらに言えば母親の側の完璧なまでの無私性、あるいは自己犠牲、献身を母性の「自然」な「本能」として要請する子どもの立場から構築された物語であることが大きな特徴であるという。欧米のフェミニズム的伝統が、「身体性を書く」「白いミルクで書く」などの言い回しで、女の欲望の主体としての座の奪回を計るエクリチュール・フェミニンの理論化を構築したように見えても、実際は、シクスーが述べる母乳や経血、またイリガライが述べる陰唇として指し示された身体は物質ではなくてメタファーであって、母親的なるものをもう一度抑圧するような娘の側のフェミニズム物語になっていたことに対する批判がフェミニズム内部から論じられるようになってきている。欧米のフェミニズム理論は、女の抑圧を基盤に成立していた家父長制文化から主体性の場を獲得する欲望に性急であったあまり、みせかけの西欧個人主義的リベラリズムから実際は排除されていた「個人」の中に自らを参入させる権利獲得に精力を注ぎ、結果として近代原理を支えてきた合理性論理に従って、自らを同化させ「男並み化」論理との共犯関係を推進させてきてしまったと言えるであろう。進歩、発展、開発の原理でひたすら前に突き進むことを優先させてきた近代論理の中で、最もその合理性にそぐわない場こそ「母親的なもの」であった。母親性に要請された矛盾した定義は、欧米フェミニズムに限らず、「遅れてやってきた近代」として括られて科学的人種主義のイデオロギーで言説化されてしまう人種・第三世界の物語の中でさらに倍加して非

合理性が露出する傷つきやすい場となりがちである。近代の西欧個人主義的合理性論理が、「一人前の個人」に成りきれない幼稚さ、非合理、野蛮として、二項対立的形而上学の枠組みによって劣等とされる側に「男並み化する欲求」「白人並み化する欲求」を引き起こすという構図を取る限り、母の身体は子供が一人前になっていくために棄却されアブジェクトされていく踏み台のような場であり続けてしまうからである。だからこそ、例えば、ラカンの主体形成モデルにおいて占める象徴界秩序を修正しようとしたクリステヴァの主体形成理論においても、母なるコーラは、子供が主体性を獲得するために棄却され、アブジェクトされる場として否定的な役割を背負い続ける位置づけがなされてしまうのではあるまいか。欧米のフェミニズム言説において、母親の身体性と主体性獲得の問題が様々なイデオロギーに絡め取られて最も困難な結節点であり続けているとすれば、ブラック・フェミニズムの観点から改訂した母親の物語は欧米のフェミニズムとどのように異なった主張をしていると言えるのであろうか？

Homi Bhabha は、近代の進歩と発展、開発、啓蒙の線的時間性、歴史性において「事実」を記述するマスター・ナラティヴに対抗する「別の時間性、別の空間性」の場を'time-lag'という概念を用いて『ビラヴィド』を説明しようとしている。[2]バーバによれば、母によって殺された娘の物語は、近代合理性の外側として「語り得ない場」に追いやられ、奪われ、抑圧されてきた過去の回帰として、さらにはベンヤミンの「歴史の天使」の概念を援用しての「投射としての過去'projective past'」としての出現である。バーバの「タイムラグ」概念の有効性を支持する Paul Gilroy は、西欧個人主義を記述するリプリゼンテイション体系において、進歩と発展の線的時間性の外側は「前近代の形式であるかのように偽装しながらも、現在に生き生きと再イメージ化され、過去からの雄弁な脈拍の中に断続的に伝承されている」とし、十九世紀において読み書き能力を獲得することが制限されていた奴隷の人種的恐怖体験から産出された音楽に「語り得ないトポス」が近代の外側（というよりも'in-between'の空間）に見つけられると主張する。[3]ギルロイによれば、奴隷音楽こそが「人間意識の顕著な表現として、言語とエクリチュールという両方の特権的な概念に挑戦するために使用されうる(74)」対抗的近代の生きた記憶を取り戻すリズムであるとする。近代が語り得ない場へと押し込めてきた奴隷制、あるいは非西欧とその歴史認識が現在にも残している後遺症についての問題を明らかにし、マイノリティの側から既存のシステムを変容させる発話の「マルチアクセンチュアル（バーバ,1992,442）」で、「選言分離的で共

約不能性（ギルロイ,212）」として立ち現れる文化の場を模索する二人の思想家がどちらもかなりのスペースを『ビラヴィド』分析のために割いているのは注目すべきであるが、この対抗的近代の理論化に母性的なるものの意義がどのように関わるのかについてほとんど言及されていない感は否めない。

そこで着目してみたいのは、被支配者の側が抱え込まざるを得なかったご主人の言語体系、文化体系に取り込まれてしまうことが内包する問題を、主に男性性に関連して考察した前編から、焦点を母と娘の関係性に移し、エクリチュールと身体性の両次元でブラック・フェミニズムのテクストがどのような書き換えを試みているのかを検証する作業である。その際に焦点とすべきは、「母の乳といっしょに姉の血を飲んだ[4]」デンヴァーに典型的に継承されていかざるを得ない黒人女性のエクリチュールの問題性であり、クルーソーとフライデイの関係性を分析するだけでは再び沈黙を強いることになる「母と娘」の身体と口の問題を前景化することであろう。既に多くの批評家が指摘するとおり、母親であるセスの手で危められた娘であり、デンヴァーにとっての姉であるビラヴィドは、同時に、一個人の生命のタイムスパンのなかで「一人前の個人」になっていくプロセスを近代の西欧個人主義的歴史記述の線的時間性において描くことを主眼とする小説様式の時間概念、空間概念を超越した別の時空間（狭義には中間航路での広義には奴隷制に対する人種の集団的記憶）へとつなぐものが重ね書きされている。[5]モリソンは、西欧個人主義的に刻まれる線的時間性を超えて生き続け、継承されていく記憶の場があることを、血肉を持ったビラヴィドと墓石に刻まれた文字としての Beloved の両者を必要に応じて書き分けたり、両者を隔てる区別を故意に混同させて、通常のリアリズムの認識の枠組みを超えた'unfamiliar'なものの出現による重ね書きによって達成しようとしている。欧米フェミニズム理論がエクリチュールと身体性の両次元を繋ぎ合わせ「身体性を書く」との言い回しで、物言わぬ身体、特にミルクで象徴される現実レベルの母の身体を回避したり、再度、沈黙させることに加担していくメタファー化を行ったとすれば、モリソンは、正にその逆のプロセス--母の身体を売って墓石に刻んでもらった Beloved の文字に字義どうり＜血肉＞を与えることによって、メタファーを 'literalization'[6]--へと書き換えたり、再度、'literalization'から、一個人の寿命の単位を超越した何世代にも渡る時間性--このような別の時間性、別の空間性こそ、近代の西欧個人主義の物差しで区切ることのできないもの--を指し示す空間性へのメタファー化によって口を奪われ、封じ込められて発話されなかった過去の身体の物語をもう一度現在に生き続ける記憶の場として再

構築する責任を促すような物語を書こうとした。[7]その両方向の動きの中で、エクリチュールと身体性の関係は、西欧フェミニズムのエクリチュール・フェミニンが、文字どおり妊娠したり出産したりする「現実の」母親の肉体を再度沈黙させ、娘のフェミニズムになってしまう矛盾の契機をはらんでしまったとすれば、ブラック・フェミニズムの観点から改訂した母親の物語は語るに耐えられないほどおぞましく絶望的であり、口にするのも恐ろしいほど具体的に流された血、盗まれたミルク、海に投げ捨てられていったまま物言わぬ身体性への記憶とともにずっしりとした物質性、歴史性を帯びて具象化されていく。

「白いミルク」が母の身体性を指し示すメタファーであるとすれば、「血」は「男／女」の差異を超越して被抑圧民族が受けたあらゆる傷ついた身体、中間航路に投げすてられたり、身を投げたり、鞭打たれ、傷つき、焼かれ、吊され、ちょんぎられ、レイプされて「愛されなかった」あらゆる身体の物語を包含する。母によって殺された娘であり、民族の集団的記憶の場でもあるという両者の役割を帯びて登場するビラヴィドは、取りあえずは、「かぎタバコ入れ」にしまいこんで語るに耐えないポールDの「男性性」喪失のトラウマ物語とその男性性概念と対照的に概念化されているであろうセスの「濃すぎる母の愛」のトラウマ物語が語りうるようになるために出現するが、最終的にはその「二つのトラウマ物語」がそれぞれ別の種類の「トラウマ物語」なのではなく、両方の物語を理解不能にさせていたコンテクストから、忘却されていた民族の原初の場を思い出させることによって黒人コミュニティ全体に対する再生の場を提起しようとしている。しかし、その再生を可能にするためには、人種的、ジェンダー的イデオロギーで絡め取られ、実際には最も傷つきやすい母親的なるものの物語を聞く耳を持つコミュニティの存在が不可欠なのである。自分の子供にミルクを届ける母の役割の重みに「剣と盾」を背負い込み、ついにはその刃を我が子に向けた「母親のトラウマ物語」への癒しは、典型的に「二匹の亀の重い楯(105,上,205)」の比喩において閉じている男女の互いの頑なな殻を打ち破ることを促すビラヴィドの機能によって可能となる。しかも、被抑圧民族が過去に背負った様々な物言わぬ身体の物語に訪れるであろう癒しは、父から息子への継承ではなく、売買され、迫害され、生産と再生産の道具として利用され、傷つけられ、欲望の対象と化されても祖先の血を絶やさずに生き延び続ける命を育んできた源として「母から娘」に引き継がれていく身体性が理解されたときに初めて訪れるように物語は展開していく。その癒しのプロセスを（1）支配的言語体系以前の場

所--母の子宮としての124番地へのビラヴィドの帰還と中間航路の海へのつらなりの忘却（2）母性的象徴界なる場所をめざして--個人主義的核家族的精神分析物語におけるアブジェクトされる母の子宮の場の閉鎖性から再生していくデンヴァーの物語に託された希望と課題--コミュニティーとしての養育義務の覚醒に向けて（3）『ビラヴィド』の現代性--「開拓地」での新生の儀式が内包するエクリチュールと歴史認識の問題性と可能性の順に論じていきたい。

（1）

ガーナー氏の存命中に営まれていたスイートホームで育った優等生であるハーレとその最後の男ポールDが、自己像を描く際に、支配者の言語秩序、家庭秩序を模倣するやり方で「一人前の男」像を描いていく価値観を引きずっていたという仮説が成立するとすれば、支配者が定義する価値観を内面化した母親像を受け継ぐセスの問題は、第一義的に自分の子どもにミルクを届ける役割に固執するプライドが、黒人コミュニティからの援助を必要としないかのように生き始める傲慢さとして受けとめられ、124番地のコミュニティからの孤立状況が強調されて物語化されることになる。[8]「血で汚れた乳首を、赤ん坊の口に入れようとしている（152,下,38）」セスに対して向けられた非難は子殺しそれ自体というよりは「彼女の頭は少し高すぎはしないか？背筋が伸びすぎていないか？」というもので、黒人女性コミュニティの代表格たるエラをして「その態度をプライドが高すぎるとも、誤っているとも思い...廃品のように心から追い出し、完全に無視した（256,下,235）」との反応を取らせるものである。黒人コミュニティとしての結束力が損なわれる契機は、奴隷制の下で、自らを定義していくような母親像を描くことが不可能であった多くの強いられた母親体験に主な原因があるとみなされよう。奴隷制の下で、多くの黒人の母たちは、スイートホームで一夫一婦制の核家族の真似事を許されたセスとは違う母親体験をしてきた。思春期に父親と息子の両方から身体を弄ばれて、毛深い白い生き物を産みはしたがミルクを与えることを拒否して死なせ「愛というものを重度の疾病」とみなしていたエラ、六人の父親から八人の子供を産み分けてきたベビー・サッグス。スイートホームでセスには可能であったような「我が夫」との間に生まれた「我が子」を確認できる幸運は例外中の例外であって、母の身体性が奴隷制における生産と再生産に好都合な道具の要として利用され、授乳は母性愛の発露というよりは、能率性から換算されてナンのような乳母役にあてがわれた集団的仕事であり、

乳母役からはずれた母は農作業に従事することが強いられた一般的状況において、奴隷の母の愛のあり方、示し方は、白人家族の一元的価値観で計られた基準にはあてはまりようもないコンテクストに置かれ、困難を極めた。様々な奴隷の母親体験の差異において、セスの濃すぎる愛の主張は、そうでなかったらいっせいに始まっていただろうはずの唄が始まらず、「その後も言葉は語られなかった。ハミングが流れた。だが一言も言葉になっては歌われなかった(152,下,39)」と、奴隷の母としての身体性の悲哀をなめてきた女たちからも排除された閉鎖的空間としての124番地の孤立を際だたせることになる契機をはらむことになるのである。自分の子供にミルクを届ける役割に取り憑かれ、剣と楯を自分一人で背負い込む責任とプライドを主張する母を待ち受けていたものは、黒人コミュニティからの孤立であり、さらに皮肉なことには、自分の子どもにミルクを届ける役割を果たさなかった母から受けて当然であると母性愛を独占すべく際限もない母への欲望を露にする生きていればもう大人になっているはずの娘の回帰であった。

自己犠牲的に、無償に自分の子どもだけに愛を注ぐことが良き母のあり方であるとセスが自らの理想的母親像を造形していたとするならば、生きているうちに降り注いでもらえなかった母性愛に対する独占欲の固まりとなって、その愛を受ける「当然の権利」を主張するかのようにビラヴィドは登場する。この血肉化したビラヴィドを、何人かの批評家は、前エディプス的[9]、前言語的幼児(ワイアット,474)、幼児的怒り[10]と精神分析的用語で呼んでいる。精神分析的用語を用いることの有効性は、例えば、「ポールD、セス、デンヴァー」の組み合わせで祭りに出かけて、手をつなぎ合った三人の影帽子になぜ待ったをかけるようにビラヴィドが登場するのか?「セス、デンヴァー、ビラヴィド」の組み合わせによって排他的に構成される第二部で何が生じているのか?「セス、デンヴァー、ビラヴィド」によって成り立つ124番地に近づこうとしたスタンプ・ペイドには、なぜ「私のもの」という声以外は女たちの咆哮が理解不能であるのか?ビラヴィドはなぜポールDを誘惑するのかなどの疑問を解決する鍵を提供しうる点にあろう。「父、母、子供」の愛情対象関係をエディプス的核家族関係構造の物語として説明してきた精神分析的アプローチの有効性(母と子の愛着関係を原初のものとする)と個人主義的に枠組みを規定する時間的、空間的限界性を打ち破って、個人とそのタイムスパンを超えた集団的記憶とをつなぐものの場を核家族的関係の枠組みの外側として指し示そうとするモリソンの手法が見えてくるからである。

前編でポールDの男性性概念が内包する問題について触れたが、その問題性は対概念としての女性性概念や家族像にも波及する。「ポールD、セス、デンヴァー」の組み合わせで作ろうとする未来像が、行方不明のハーレに取って代わるポールDが家父長制の長の座につくだけで、核家族構造が内包する価値観を模倣しているにすぎないとすれば、そのような白人的価値観を無反省に反復するだけでよいのか？「二つのトラウマ物語」が固い殻の内側にそれぞれの傷を隠蔽したまま理解し合うことなく前に進むことで、黒人たちの明るい未来像が本当に実現するのか？そのような問題を不問にしたまま進歩、発展の線的時間性に同化することへ疑義を唱えるようにビラヴィドは出現する。しかも、ビラヴィドは近代がその合理性論理において忘却している、より原初的で第一義的な欲望の発露の場として、前エディプス的、前言語的幼児にとって、母の子宮によって守られていた母子共生の空間への回帰の場を想起させようとして登場する。後にポールDがセスの足の数を数えて124番地を立ち去った時に、セスが思うのは、ポールDへの欲望によって、一義的に取り戻されるべき欲望を忘却していたことへの後悔である。

ポールDに母の子宮という始源的場に触れてもらうよう欲することによって、核家族構造が規定している役割イメージに取り込まれたままの価値観に修正を促す触媒的役割を果たすのも、またビラヴィドである。ビラヴィドがポールDを誘惑するのは、若い娘の身体へのポールDの欲望の発露としてではない。ビラヴィドとセスの関係性は後に、母と娘の関係が逆転したかのようにデンヴァーによって観察されることになる。その経緯は後述するが、ビラヴィドがポールDに対して欲することは「あんたにね、あたしの躰の中を触ってもらって、あたしをね、あたしの名前で呼んでもらいたいの（116, 上,225）」と表現されている。この表現を言い換えれば、ポールDの＜男性性喪失物語＞によって形成されたトラウマがもう一つのトラウマ物語との対話を阻んでしまっている殻の内奥に触れることで、語り得ない物語を'renaming'していこうとする欲求であると言えまいか。[11]ビラヴィドを前にしてポールDは、自分の身体を自分の意志で動かすこともできず「布切れでできた人形みたいに」彼女の望む場所に行かされるのに抵抗しようがない。ポールDがこだわりとして固執しようとしていた＜男性性＞概念の固い殻は、ビラヴィドが望むままにこじ開けられ、その概念の問い直しが誘発されていく。

女がまるで海面の澄んだ空気ででもあるかのように彼は上に行こうともがき喘ぎ、女の中を突き進んだのだ。彼女と性交するのは楽しくさえな

かった。それは性交というより生きてこの世に留まろうとするやみくもの衝動に近かった。...嫌悪と我が身恥ずかしさのまっただ中でも昔自分が属していた深海のような場所まで付き添われていったことに感謝もしていたのだ。(264,下,249)

ビラヴィドがポールDに触ってほしいと欲した場所は、ここで、大きな「深海」へと連なっていく母と娘の子宮の場としてメタファー化された空間であり、<男性性>概念への枠組みに囚われて忘却されていた「別の時間、別の空間」を取り戻す契機を促す。ビラヴィドの欲望にポールDが自分の躰さえも自分の意志どおりに動かすこともできなくなるのは、ビラヴィドがセスに殺された娘の回帰という次元を超えて、エクリチュールの始源の場において暴力的に奪われた無数の物言わぬ身体の物語がこの世では忘却されてしまった場を思い出してもらうことを欲する包括的な役割機能を備えているからであり、一人前の個人になるプロセスの物語のプロットにおいて、忘却されてしまう原場面における喪失の場を指し示すべく、多くの「愛されなかった」身体が所属するはずの場を思い出す欲求を体現しているからである。ビラヴィドは、ポールDにセスにデンヴァーに、支配者の価値観に取って代わられていくことで失われてしまった記憶を再構築するよう'rememory'[12]を促す。その作業を可能にする場は、西欧個人主義的価値観によって「自画像」が構築されていく以前の原シーンとしての子宮のイメージと中間航路の海のイメージの重ね書きの場においてである。その両イメージの重ね書きによって喚起されているのは、忘却されがちな、略奪され迫害された民族の歴史的起源の場としての母なる子宮的海である。「母なる海」というイメージが単なるメタファーに還元されない場を思い起こさせるのは、もちろん、モリソンの小説が、中間航路で投げ捨てられたり、飛び込んで身投げした数多くの物言わぬ身体の物語の史実を具現する方向性で描写されているからである。

「ポールD、セス、デンヴァー」がサーカスから帰ってきた場面でも、類似の重ね書き手法が取られている。サーカスからの帰り道で生きていればそれぐらいの年格好であったであろう若い娘となって登場したビラヴィドを目にした時のセスの身体反応である。

すると、すぐその場ではなぜか説明がつかなかったのだが、そのドレスの主を見ようと近くに来た瞬間に、セスの膀胱がいっぱいになったのだ。...尿はとめどなく流れ出た。馬みたいだわ、と彼女は思った。それ

でも水はどんどん出つづけて、彼女は、そうじゃないわ、馬よりもデンヴァーが生まれた時、ボートに溢れた水に似ている、と思った。...しかし、羊膜が破れた子宮から迸る水を止めることなどできなかったし、いまもあの時と同じように止めることができなかった。(51,上,100-101)

ビラヴィドを見た瞬間に尿意を催して放尿するセスと羊膜を破ってデンヴァーが生まれ出た子宮の場をパラレルに対比させながらも、この場面が母の子宮から生まれ落ちる一人の子供の出産シーンを超越する契機を内包することになるのは、一人の母親の子宮から溢れ出る羊水の量とはけた外れな「水」が物言わぬ身体が捨てられていった中間航路の「深海」の場とつながっているからであろう。「海」からやってきた娘は、セスに「昔自分が属していた深海のような場所」を思い出させようとするのであるが、デンヴァーが生まれた時のことは思い出されても、この時のセスにはそのような認識は訪れない。ポールDに乳房の重みを預けられると期待して、少女のように振る舞ったセスのポールDへの欲求が邪魔をして、第一義的欲求対象としての母と子の原初の場が忘却されていると同時に、血肉化したビラヴィドの帰還が抑圧されて愛されないままに捨てられた多くの語られない身体の場所でもあることに、セスが無意識のままであることに原因があると指摘できよう。

ポールDが124番地を出ていった後、代わりに形成された「セス、デンヴァー、ビラヴィド」の組み合わせは、当初、母の子宮から生まれ落ちる以前の胎児と一体化した至福の状態をイメージさせる。「ポールD、セス、デンヴァー」の三人を路上に映しだした影法師がハーレの代わりにポールDを家長とする核家族像のモデルと価値観を引きずったものであるとすれば、「セス、デンヴァー、ビラヴィド」がまるで三人の足の数の合計が六ではなくて三でも、ころばずにスケートが出来ることを試してみようとする場面で、三人の呼びかけによって成り立つ場は、間主観的'intersubjective'な呼びかけというよりは、内主観的'intrasubjective'な関係性への回帰を欲望していると私はみなしたい。三人が寄り添い合って作り出すタブローは、西欧個人主義的ヒューマニズムの認識に生まれ落ちる以前の欲望を取り戻す母と娘の共生的関係に立ち返る原初の場としてイメージされていて、その母の子宮的な閉鎖的場は、足の数の不足あるいは過剰を人間に成りきれない動物として貶める場ではなく、だからこそ寄り添い合うタブローとしての共生関係が醸し出す至福に満ちている。手をつなぎ互いに支えになって、円や線を氷上に描いてくるくるまわってプレイを楽しんだ後で、セスは別の拍子のようなものに気

づくのである。

> カチリと何かが閃いた時、セスはそれが何だかわからなかった。後になってから、この閃きは最初の最初にきたのだということが、白昼の光のように、はっきりした---一拍、音が流れ出す前の、ほとんど一拍に近い音。三つの音符が耳に入ってくる前、旋律がはっきりとしてくる前の最初の一拍だった。少し前に乗り出すようにして、ビラヴィドは低く鼻唄を歌っていた。セスが、カチリと何か閃いたことを思い出したのは、ビラヴィドが歌うのをやめた時だった--様々な断片が、おさまる場所にぴたりとおさまり、特別に、三人のためにあった。(175,下,79-80)

忘却されてしまった言語秩序の外側（あるいは以前）として母の子宮のような閉鎖性を持ってイメージされているのは、「セス、デンヴァー、ビラヴィド」の組み合わせによる「フーガ形式のような交差し相い、隙間を作っていくような主観性'intersecting and interstitial subjectivities'を基盤にした別の認識の仕方としての知」のあり方を指し示す場所であるが、ここでは「音が流れ出す前の、ほとんど一拍に近い音」として表出している。この「言葉以前の音が流れ出す前の最初の最初」の場所としてイメージされているものこそが、ご主人の言語によって主体が形成されていくプロセス、父の名(the name of the father)として指し示される象徴界への参入以前の複数形としての「主体構築の場」への言及である。この「主体構築」以前の原場面が黒人たちにとっては、西欧文化への強制的参入以前の民族のルーツを辿る場を同時に示唆していることをもう一度強調しておきたい。忘却の場を思い出させようとするかのように'multi-identified Beloved'は、殺された娘の言葉においてだけではなく、「海から来た女」の苦悩に満ちた言葉で反応するとDevorah Horvitzは説明する。[13]

> ビラヴィドは自分を置き去りにした、と言ってセスを責めた。優しくしてくれなかった、自分に笑いかけてくれなかった、と言って、責めた。自分たちは似ていて、同じ顔を持っているのに、どうして置き去りになんかできたのよ？とビラヴィドは言った。...セスはあたいのところへちっとも来なかったし、声もかけず、笑いもせず、いちばんひどいのは、さよならと手も振らず、あたいのとこから逃げていく前に、こっちを振り向きさえしなかったんだよ、と言った。(241-242,下,206-207)

確かに、ここでビラヴィドがセスを責めている理由は「子殺し自体」ではなく「置き去りにした」ことであり、「同じ顔を持っているのに振り向いてもくれなかったこと」である。この「海から来た女」の言葉が、セスによって殺された娘のシニフィエから隙間を作ってどんどんずらし、多くの似たような境遇に置かれた「母と娘」の無数の物語を指し示すシニフィアンの連鎖を暗示させていく。「海からやってきた女」である「ビラヴィドは、奴隷にされた女たちのためにアフリカとアメリカをつなぐ重要なリンクであり、彼女は、セスの母であり、セスであり、セスの娘である(163)」とするホーヴィッツは、「名前を持たず、時間や場所を指し示すこともない一人称で創り出された流動的でオープンな」エクリチュールは、「形式の境界を超え、このキーとなる一節は、人間の境界を超えて移動するモリソンの幽霊のようにセスの母が苦しんだ死のような中間航路を伝達している(162)」と説明する。支配者の言語が形式と言葉の壁によって、秩序の境界を定め、規範とする価値観を枠付けていくとすれば、ビラヴィドはそのようなエクリチュールの形式を飛び越えて、死者が横たわる中間航路の場所から発せられたような声を喚起しているのである。母としての責任を一人で背負い込んだセスに、スイートホームに来る以前にセスの母の娘であった記憶の場所、その母が娘であった記憶の場所と何世代にもわたるつながりを想起させるような声を'multi-identified Beloved'は発しているのである。そのようなつらなりこそが、西欧言説において「男性性」「女性性」「母親的なもの」として概念化される記号の中で忘れて去られてしまいがちな言語秩序の隙間から聞こえてくるリズムなのではあるまいか。「セスの母親とナン」が使っていた言葉、唄、踊りの記憶の場所、一度も見たことがないはずの「れい羊(31,上,61)」に蹴られているかのようなリズムを秘めた唄と踊りの記憶。セスの意識から忘却されていて、断片的にしか想起されない民族的歴史的ルーツ、124番地以前、スイートホーム以前の場とのつながりを「同じ顔を持つもの」として「海から来た女」の声を認識してもらうことを欲して出現するビラヴィドは「子宮と奴隷船の墓、中間航路でかがむ姿勢と胎児の姿勢、海と尿、ミルクと血を大胆にも同一視するような、個人的なものと文化的なものの複合的記憶なのである。(ハーシュ,1994,105)」

(2)

Karin Luisa Badt は、「モリソンの小説を読むことは、暖かく感覚的で圧倒されるような子宮の雰囲気に包み込まれるのに似ている。何度も何度も我々は、精神分析用語で言えば、幼児の差異化されない自己感覚へと退行し

ていく[14]」パターンを持っていて「例えば、『ビラヴィド』では、登場人物が経験した自己感覚の暴力的断片化は再生の手ほどきをするようなプロセスになる。セス、ポールD、デンヴァーはビラヴィドの抱擁に屈して子宮に再度回帰し、自分たちが何者なのかをはっきりと認識するように'洗礼されて'出現する。(568)」と説明する。第2部でポールDへの欲望よりも優先するものとして示された「セス、デンヴァー、ビラヴィド」の組み合わせによる至福に満ちた笑い声も永続するわけではなく、ナルシスティックな子宮の場から「再生」することと、124番地がコミュニティから断絶している状態から回復することの不可欠さがパラレルに示されることになる。黒人の母が何の価値も持ちえないマイナスの白人優位環境において、母の身体に回帰するジェスチャーは、黒人の母の尊厳と価値を取り戻すと同時に、民族の歴史的ルーツを「リメモリー」するための政治的な癒しのプロジェクトとしてプロットに組み込まれていて、母の身体、歴史、欲望は、個体発生の場から、集団的再生の場へと収斂し変容していくような意味作用複合体へと折り重なっていかねばならないからである。そのプロセスで不可欠な要素は、「母と娘」の身体の境界を侵犯していくセスとビラヴィドの関係性に内包される問題が次第にデンヴァーによって注意深く観察され、124番地の閉鎖的空間からの離脱が試みられる順序と方向性を持って展開されていくプロット自体の中に示唆されていて、デンヴァーによる離脱の試みはコミュニティとしての再生の儀式としての意味合いが込められている。

> セスの方にかがみ込んでいるビラヴィドが母親で、セスの方が歯が生え始めている子供に見えたのだ。ビラヴィドの躰が大きくなればなるほど、セスは小さくなっていった。...ビラヴィドがセスの命に侵入し、奪い、それを滋養に膨れ上がり、それを踏みつけ、ますます丈高くなっていく一方で、セスはお仕置きされた子供のように、唇を舐め舐め椅子に座っていた。年上の女は不平一つ洩らさず、その命を放棄したのだ。(250, 下,223)

ここでデンヴァーによって観察される「母／娘」の関係性は(a)ビラヴィドを母によって殺された娘の帰還とする機能に対しては、自己を犠牲にして子どもに無条件に奉仕すべきであるとする母性愛イデオロギーに縛られたセスが、保証されなかった母からの愛を独占すべく途方もなく欲求を肥大化させていくビラヴィドを拒否できずに、母の自己を吸血鬼のように吸い尽くし

て命まで奪ってしまう危険性をはらむ娘の要求として知覚されていくことを示す。[15]ゆえに「デンヴァーが最初に始めた仕事、ビラヴィドをセスから護るという仕事は、母親をビラヴィドから護ること（243,下,209）」に変わっていくのである。他方（b）狭義には中間航路での広義には奴隷制に対する人種の集団的記憶へとつなぐものとする機能に関しては、一人の母親の子宮には収まりきれない数々の物言わぬ「愛されなかった」身体が飲み込まれていった「深海」をはらんだかのように「よく実った西瓜そっくりの腹（250,下,224）」がどんどん膨れていく現象として妊娠したビラヴィドの姿が観察されていくことを示す。この膨れ上がった腹が、被抑圧民族の過去それ自体をはらむことの'literalization'であるとすれば、そりかえって膨張した腹を抱えて現在を乗っ取ってしまっているビラヴィドからの救出が急務であるとの認識が促されていくことになる。その認識とは、過去の重荷に押しつぶされることなく、しかし過去の遺物として忘却してしまうのでもなく、正しい歴史認識をもとに現実認識を形作っていく責任を問いかけるものである。ビラヴィドが見る二つの夢「爆発する夢と呑み込まれる夢（133,下,4）」とは、被抑圧民族の集団的記憶が忘却されていってその結束力を失っていく危険性と支配者のシステムを内面化してそのシステムに取り込まれていってしまう危険性の両側面を現しているのではないか。だからこそ、集団的記憶をはらむ「深海」の場を身体化したビラヴィドは、自分の躰がばらばらに飛び散ってしまう痛みに泣くのである。どちらにしても望ましくない結末を迎えようとしている閉鎖的凍結状況を癒すために、デンヴァーは、124番地から抜け出す勇気を持とうとする。もっと大きな世界を知ろうとしてレディ・ジョーンズのところへ出かけていき「書き方と算数」を習おうとしたにもかかわらず、ネルソン・ロードの質問でまったく耳が聞こえなくなって秘密の部屋に閉じこもってしまった経験を持つデンヴァーにとっても、124番地に閉じこもってしまった二年間が「前エディプス期的ディスコース」を発話していく準備期間としての意義を持つとの見方（フィッツジェラルド,675）に私は賛成である。ポールDが出現したときに露骨に示した嫌悪感と比べて、母のミルクといっしょに姉の血を飲んだデンヴァーのビラヴィドへの渇望は、「小文字のｉや自分の名前を作っている文字の美しさ」を書いていく好奇心が「インクとともに混じり合う血」の恐怖から、母の子宮的な閉鎖空間である124番地へ逆戻りさせてしまった時間を取り戻して小文字のｉをもう一度再生し直すために必要な根源的欲望と結びついているからである。ここでは、精神分析用語を用いたバットの「退行」というネガティヴなニュアンスから、再生のための必然的プロ

セスとしての子宮的124番地への回帰であり、ビラヴィドとの対話を経て初めて生まれ変わりが可能となるプロセスとして、デンヴァーにとってポジティヴな位置づけへと変更されていることを確認しておきたい。

母性愛イデオロギーに縛られて自己と他者の関係が互いを殺しあったり、吸い尽くし合う危機をはらむ「母と娘」のもつれ合った関係に留まるナルシスティックな世界から、デンヴァーが離脱する意志を持つことによって、124番地を孤立させていた状況の過ちが黒人コミュニティにも認識されていくことになる。エラを先頭とする三十人の女たちのグループによる救出劇を生み出す契機は、デンヴァーがセスの娘としてだけでなく、「コミュニティの子供として（ワイアット,483)」認識され直すことから誘発されている。「自分の子供」にミルクを届ける母親役割から、「我々の子供」としてコミュニティがその養育義務に覚醒していく瞬間である。この救出劇が別の時間、別の空間としての位置づけをされている「開拓地」の到来として描写されていることは注目に値しよう。

> セスは、暑さと眩しく輝く木の葉といっしょに、「開拓地」が自分のところへやってきたようだと思った。「開拓地」で、女たちの声は、ぴたりとなじむ音の組み合わせを捜した。キーをコードを、言葉の背を破る音を捜した。その音を見つけるまで、声の上に声を重ねて、ついに見つけた時は、それは深い水の中から響くような、音の波となって広がり、クリの木からイガを叩き落とした。音の波はセスの頭上で砕け、彼女は、波のしぶきで洗礼を受けた者のように震えた。(261,下,244)

支配者の言語コードを破って「深い水の中から響くような、音の波」を捜す試みこそ、実はご主人の価値観で分節化された言語秩序を内面化していくプロセスの中で忘却されてきたものであった。ワイアットは、これを母的象徴界(A Maternal Symbolic)と名づけている。これは、もちろんラカンによる〔言語を習得する時期（およそ生後十八ヶ月）に幼児は「想像界」から、「父の名= the Name of the Father」として示されるような象徴界秩序に入っていくとする〕自己形成モデルを「母の名」へと書き換えたものである。ワイアットによれば、「第三部で、母と娘の自己消耗的な（self-consuming）循環を断ち切る手ほどきをし始めるのは、セスの生き残った娘のデンヴァーである。...デンヴァーは、滋養分を与え、読むことを教えてくれる言語と交換の社会秩序に加わる。(482)」と、生き残った娘のデンヴァーに与えられて

いる使命を重要視している。モリソンは、このようにして母的な養育原理と父的な抽象意味作用秩序という伝統的精神分析にある対立に挑戦し、象徴界に参入するよう書き換えていると説明しているのである。このように捉え返せば、「母のミルクといっしょに、姉の血を飲んだ」生き残ったほうの娘デンヴァーに託されているエクリチュールが内包する課題の在処のいくつかが見えてくる。

「セス、デンヴァー、ビラヴィド」の関係において、デンヴァーが学びとったことは、母と娘の関係が自他の線引きをし難い「自己」に生まれ落ちる以前における共生の場を指し示すとしても、母の子宮に固着したようなありようは、母にとっての自己を育てていくことを妨げる危険をはらむと同時に、娘にとっての自己を育てていくことの妨害にもなるということである。その意味で、セスが牢から出てきた後も、自分一人でミルクという滋養分を自分の子供に与え続けられるかのように振る舞っていたことの母親の側の過ちが、生き残った娘を124番地という母の子宮のような閉鎖空間に留まり続けさせ、死んだ娘を甦らせ、居座り続けさせる元凶になったと見ることができる。セスがコミュニティから見捨てられたのは、子殺しそれ自体というよりは、狭義の母性愛「濃すぎる愛」に縛られていたセスが、もっと広義の意味でのコミュニティを育てるという視点を欠如していた過ちのためと捉え返しうる。デンヴァーは、過去の過ちによって現在が押しつぶされる状況を許してしまった黒人コミュニティ側の責任をも問い直していく契機を促す。特に奴隷の母が置かれていた社会的・歴史的コンテクストにおいて、母親経験の差異を黒人女のコミュニティでさえ理解し合えず孤立に追いやってしまう状況を作ってしまうとすれば、白人の理想的な家庭モデルが許されていなかった黒人にとって、そのモデルに照合させた見方自体が破壊的に作用することとなる。核家族の枠組みの外側に血縁関係を超えて、互助精神に基づいたネットワークのより大きな輪によって次世代を育んでいく別の知のあり方がなければ、黒人たちを「愛そうとしない」現世に生き残っていくことはできない。そのために、デンヴァーにとっても耳が聞こえなかった二年間とその間の孤独は、母的子宮の閉鎖性から抜け出してもっと広い世界へ再生するための時空間となっている。エイミイ・デンヴァーという白人娘の手助けとその名をもらい、もはや一歩も動けない状態から奇跡的に生まれ出て、流血沙汰事件の中でも生き残った娘には、「母の濃い愛によって殺された姉の血」を飲む運命とともに、その歴史的重さにつぶされずに前を歩いていく知恵が授けられているとの期待が込められていると言えよう。

（3）

しかしながら、『ビラヴィド』という物語の中で、デンヴァーに託されたエクリチュールの課題は、容易に達成可能であるかのようには書かれていない。その困難性が、長く続いた奴隷制度とその後遺症として、被抑圧民族に背負わされている負の遺産としての現代的課題と歴史認識の問題とを結びつけるように設定されているからであろう。[16]1873年という語りの現在の時点では、もはや廃止されている奴隷制度が、実はその後も目に見えにくい形で人種差別の構造を複雑化していき、公民権運動を経た現在にまで残存していく現実認識の問題であることを、いかに提示するかということがモリソンにとって重要な課題であった。奴隷制度廃止によって獲得したと思えた身体性の自由は、「自由な私のエクリチュール」の獲得の問題と分かち難く結びついており、その結びつきの問題に対して、黒人コミュニティ側が無自覚であることによって新たな脅威に晒されることになるのである。その新たな脅威が簡単に手に入れられそうに思えた自由への道に仕掛けられていた様々な落とし穴として、奴隷制が制度としては廃止されていた年を語りの現在とする語りの設定の仕方に組み込まれている。奴隷制度下、孝行息子の休日を返上しての労働によってオハイオ河を渡り「自由」を手にしたベビー・サッグスの自画像造りの難しさは、次のように描かれる。

> 悲しみが彼女の存在の中心に居座っていたからだ。ほんとうの「自分自身」になったことのない自身が、見捨てられ、荒れはてた彼女の中心に居座っていたのだ。自分の産んだ子供がどこに葬られているのか、生きているとすれば、どんな容貌なのかを知らなかったのは、確かに悲しいことだが、それでも彼女は、自身についてより、子供たちについてよっぽど多く知っていた。自分という人間を発見するための地図など、一度も手にしたことがなかったからだ。(140,下,15-16)

「ほんとうの自分自身になったことのない自身」が見捨てられ荒れはてた自己の中心に自己の地図を描くことの困難性とは、自己の地図の真ん中に空いた空白をご主人の価値観でそのまま埋めてしまう陥いんを示唆していると言ってよいであろう。長く続いた奴隷制の中に生きた後、支配者の価値観によって埋め尽くされてしまい歴史的、文化的ルーツを喪失してしまった被抑圧民族の問題は、「自己」を生み出す地図を描こうとする際に、オリジナルな自己を見い出すことの困難さ、真ん中にぽっかり空いてしまった空虚さ、別

の時間、別の空間を描き出すことの難しさとして示される。強者の論理で「歴史的事実」として記述されるエクリチュールの暴力とともに、支配者の価値観以外で計られる場所が被抑圧民族の内部においても忘却されていきがちであったからである。「開拓地」でのベビー・サッグスの新生の儀式を特徴づけるものは、「あそこ（支配者側）（88,上,172）」が愛さない生身の躰を「ここ（被支配者側）」がいつくしみ、自己の身体性への権利を回復することと、「御言葉」と大文字で示されている言説に対する権威（authority）を獲得することの両面がいかに切り離すことができずに連関しているかという問題の在処への喚起の仕方である。[17]オハイオ河のあちら側とこちら側という空間的地図の描き方で拘束から自由へのレールが即座に敷かれたわけではなかったし、奴隷制と奴隷制廃止の時間的配置によっても拘束から自由への道が即刻、手に入ったわけでもなかった。身体的自由を手に入れたと思った瞬間に言説に対する権威を持ち得ない民族を待ち受けていた落とし穴は、ステレオタイプ化によるエクリチュールの暴力によって傷つけられることになる新たな身体の物語を歴史に刻みつけていくことになる。[18]

具体的には、「黒人男性＝レイピスト」神話の出現によって、奴隷制廃止後も多くのリンチ殺害が繰り返されることになる黒人にとっての悪夢とは身体の自由とエクリチュールの自由の問題が密接に関わるために生じたためであると、モリソンは警告を打ち鳴らしている。言語化して「記述していく」権威を所有しえない傷つけられた身体の物語は、エクリチュールから立ちのぼる「血の臭い」として、支配者側、あるいは「定義する側」によって振るわれるエクリチュールの暴力が被支配者側、あるいは「定義される側」の身体に行使され続けることになる力の問題と絡み合って生じていく運命にあった。ベビー・サッグスを骨髄まで疲れさせる「鮮血の生々しい色」と「付着している皮膚の臭いがつきまとうリボンの赤い色」の関連をベビーが死んだ後になって思いいたすスタンプ・ペイドは、「首が折られた同胞、血が火で煮られた同胞、そしてリボンをなくした黒人の少女がいる種族（181,下,90）」の女たちの咆哮を「私のもの」という言葉以外は聞き分けられない。黒人男性をリンチに晒すことを正当化していく奴隷制廃止後の史実展開の中で、再度、沈黙を強いられ、陵辱され、捨てられることになる身体の物語の最底辺に、黒人少女の「赤いリボン」が「血の異臭を放つエクリチュール」としての象徴的な場を占めていることに、どこまでも無意識であったからである。[19]新たな神話づくりに貢献していくエクリチュールの力は、奴隷制度廃止後も「血の異臭を放つエクリチュール」を歴史的無意識の場に刻みつけていく。

「それは（血の異臭）「北極星」紙の紙面から、目撃者の口から、手から手に届けられる手紙に刻み込むように書いた文字から、立ちのぼった。事件を記録した証拠文書や、読んでくれそうなら、どんな法的機関にも提出した、前口上を長々とつけた請願書に詳細に記述されて、血は異臭を放った。だが、そんなことでは、いささかも彼の骨髄は疲れていなかった。いささかも。リボンのせいだった。(180,下,89)」

「母の乳といっしょに姉の血を飲んだ」デンヴァーに課せられたエクリチュールの問題と「血の異臭を放つエクリチュール」の問題は、この血の赤い色において重ね書きされていく。1855年に時代設定されている流血沙汰事件の前に起こったことか、後ちに生じたことか（或いは奴隷制が存続していた間か、それとも廃止後か）という歴史的因果関係はそのような時間性を無効化するような「エクリチュールに混じり合う血＝エクリチュールの暴力によって傷つけられる身体」の問題に象徴されていくのである。奴隷制下、孝行息子の休日労働によって身体的自由を買い取ってもらったハーレの母ベビー・サッグスは、自由になった他の黒人コミュニティを取りまとめるべく開拓地に行って、奴隷主に拘束されない＜新生＞を祈る儀式を行うが、流血事件を引き起こす遠因となった「非難の臭い...白人たちのものではなかった－それだけはわかった－だとすると黒人の嫌悪だ（138,下,12)」をもたらしただけであった。ベビー・サッグスが行った大盤振舞いしすぎた祝宴を「度がすぎる」と憤怒させ、嫉妬させ、逃亡奴隷捕囚にやっきになる白人たちの到来を知らせないという黒人コミュニティ側の「妬みの感情＝自由を先に得たものの驕りと把握される」は、奴隷制下、既に垣間みられた黒人コミュニティとしての結束を乱すことになる契機である。この黒人コミュニティ内部の差異の問題とスタンプ・ペイドが、ベビー・サッグスに課した「御言葉を語るんだ！」との「新生」の儀式の巫女を演ずる役割を破綻させる遠因は、基本的に類似の問題性を示唆している。支配者の言語秩序に埋め尽くされた民族にとって新生で、オリジナルなエクリチュールの場を求めようとする試みが黒人コミュニティ内部に生じていくことになる差異のせいで共感を呼ばず、結束を乱す原因となって、失敗に終わっているということである。何故失敗に終わるのかと言えば、それは、支配者の築いた「男性性」概念に捕らわれたポールDのトラウマ物語、「母親性」に拘束されたセスのトラウマ物語に内包されていた問題（支配者の価値観をなぞるという問題）を無意識のうちに反復させてしまいがちであることに一因がある。[20]ベビー・サッグスは流

血沙汰事件の後、「それも（御言葉）また、わしから奪われてしまったんだよ(178,下,85)」と「新生」の儀式を試みる気力も失ったままキルト布団の陰鬱な色彩を見るだけで寝込んでしまうが、身体的自由の獲得と自らのオリジナルな物語を紡ぎ出していく言説の権威を獲得する自由とを結びつけることの困難性に押しつぶされてしまったためと言えよう。ベビー・サッグスの「汚れのない新生の身体性とインク」を獲得する試みの失敗と1874年の語りの現在における「ケンタッキー州だけでも一年に八十七件のリンチ（180,下,89)」事件への言及は、白人優位社会を維持しようとする力によって、奴隷という身分から解放されて自由を得たはずの黒人たちを待ち受けていた新たな脅威が「{母の乳といっしょに姉の血を飲んだ}／{血の異臭を放つエクリチュール}」事件の時間性（事前／事後）を無効化させてはらんでいくことになる問題を書き込んでいく。身体の自由が奴隷制廃止によって制度的には保証されたように見えても、既存の政治、経済、エクリチュールのシステムは「被支配者側の物語が発話可能になるような権威」を同時に保証するわけではなく、新たな支配の力を被支配者側に揮うことになるからである。色彩に飢えているにもかかわらず「生の人生のように（38,上,78)」猛々しく目立った二枚のオレンジ色にまで進むことができず、キルト布団の陰気な色彩だけを眺めて寝込むベビー・サッグスの姿と「赤ん坊の鮮血を目にし、別のある日に、ピンクの墓石の斑点を見て、それが色彩を心にとめた最後になった(39,上,79)」セスの奴隷制廃止があったにもかかわらず続いた十八年の孤立状況は、実は解決されないまま残された黒人コミュニティ側の課題を明確にするために、反転の契機を誘発すべく仕掛けられた時間設定なのであろう。ここで被抑圧の歴史の重要なメタファーとして機能する血の赤い色は、あまりにも悲惨なために「生の人生」を封印してしまおうとする黒人コミュニティ側の歴史忘却の問題性を指し示す場であると同時に、歴史を見つめ直して初めて「自己」の場所を確認できるはずの「赤い心臓」が脈づいている身体とエクリチュールを繋ぐ場でもある。[21]

ベビー・サッグスの死後、麻痺した感覚を取り戻すのに何度も優しくさすってくれた感触を懐かしみながら、セスは義母の「新生」の儀式を思い出そうと「開拓地」に赴くがそこでセスを待ちかまえていたのは、もう一度口を塞がれることであった。首を締めるジェスチャーは、典型的に声を発することが阻止されることのメタファーであるとすれば、この出来事が示唆することは、奴隷制廃止後も、さらにその後に到っても、母の主体的声が理解されることは困難を極める状況が継続されていくことのメタファーでもあろう。

うなじに触れている指には、いま、さっきよりいっそう力がかかっていた。ベビー・サッグスが力をこめているのか、ひと揉みひと揉みが大胆になった。両の親指をうなじに置き、残りの指は左右の首筋を押した。もっと強く、もっと強く、動きながら小さな輪を描いて、指はゆっくり首をまわって喉笛に接近した。首を締められているのだとわかった時、セスは恐怖にかられるより、ほんとうに驚いた。それとも、締められているように感じただけなのか。どちらにしても、ベビー・サッグスの指が、息がつまるくらい、締めたのだ。座っていた岩からころがり落ちながら、セスは実際にはそこにない手を、夢中でひっ掻いた。デンヴァーが、続いてビラヴィドが駆けつけたとき、セスの足は空を蹴ってもがいていた。(96,上,187)

母の首にキスをしたと主張するビラヴィド／首を絞めていたと非難するデンヴァー／ベビー・サッグスが優しくさする手と誤解するセス。三人の見たもの、感じたものはそれぞれずれており、真相は何かを単一で一元的な「事実」として記述することを拒否している場面である。母親の首を締めたのはビラヴィドであるとするデンヴァーと自分はキスをしたのであって「鉄の輪が首をしめた(101,上,197)」と主張するビラヴィドとの間での認識のずれは、デンヴァーに見えたものが母親の主体性を許そうとせずに子宮にもう一度入り込んで母の無償の愛を独占する欲望の固まりと化した姉の姿である（ゆえに母の声を娘がもう一度抑圧する）のに対して、セスによって殺された娘であると同時に、「鉄の輪を首にしめられて」沈黙を強いられた多くの黙して語らない口の代表であるビラヴィド（抑圧された過去として立ち現れたビラヴィド）がセスに見てほしいと思ったものは母の「記憶の網をすりぬけてしまって、甦ってこなかった何か(98,上,191)」の場所である。セスの「記憶の網をすりぬけてしまったもの」こそ、スイートホームの例外的措置によってセスが抱えてしまった良き母親像へのこわばりを形成した場であり、逆に言えばスイートホーム以前には持っていたかもしれない別の時間、別の空間を喪失してしまった後の場としてしか立ち現れないトポスである。しかし、奴隷制（過去）の重みを取り除く場は、核家族的な母親観によって生ずる重圧をコミュニティ全体による共同責任へと括り直すことで再生の場が模索されていく。そのプロセスは、エラを中心とする三十人ほどの女たちによる124番地の救出劇として、支配者の価値観をずらす隙間が示唆される。この隙間は典型的に言語以前の場に立ち返った音を示すものの比喩として表出する。

間髪を入れず、跪いている女たちも、立っている女たちも、エラに倣って叫んだ。祈るのをやめて、一歩さがって原初に還った。初めに言葉はなかった。初めにあったのは、音だった。女たちは一人残らず、それがどんな音を立てたか、知っていた。(259,下,240)

女たちとの和解、或いは対話的関係を可能にしていく筋道が示唆された後に、ポールDとの対話的関係の回復が暗示されることになる。「二つのトラウマ物語」の対話的関係が、どちらの側にもこわばりとしてあった殻をはずす作業がなされた後に初めて可能になる。この時に「木のうろで見つけた鋲かざりのついた宝石箱は、蓋を開ける前に、やさしく撫でてさすってやらなければならない。錠前は錆びてしまっているかもしれないし、壊れて、止め金から外れてしまっているかもしれない(176,下,81)」と喩えられたポールDの男性性喪失物語への癒しをもたらす契機は、言語以前の場（母親的コーラであると同時に、支配的文化以前の場でもある）に触れることによって可能になる。冷蔵小屋、物置、ベッドと出ていった時と反対の順路を取って帰宅するとき、ポールDがセスに求めたものは、もはや核家族モデルの長の座ではない。シックソウが三十マイルの女について感じていた「あの女はおれの心の友達よ。おいらを一つにまとめてくれる。バラバラのおいらをさ、一つにまとめてさ、ぴたっと、まともなおいらにして返してくれるんだ(272-273,下,266)」という対等の関係性が強調され、「たくさんの語るに耐えない物語りを背負ってきた二人の物語を隣りに置くことである」と差異を理解した上での対話性へと変更されている。シックソウが捕らえられた時に、「先生」に使いものにならないと確信させた唄を思い出しながら、「自分もいっしょに歌えばよかった、と彼は思う。大声で、シックソウの節に合わせて、高らかにうねるように何かを歌えばよかったのに、あの言葉が彼をひるませた--彼には理解できない言葉だった。音の意味はわかったんだから、言葉がわからなくても、かまわなかったのに。憎悪がほとばしり流れ、ジューバの踊りのようだった。(227,下,182-3)」

「二つのトラウマ物語」の傷を癒す場として、どちらも言葉以前の「音、リズム、踊り」という場所、近代西欧文明の言説に取り込まれてしまって忘却されてしまっていたかもしれない場所を示唆していることに、再度注目を促したい。さらに、ポールDの124番地への帰還について「ポールDの訪れを通して、母と娘の筋書きの中に男が戻ってくるが、しかしこの場合は、より大きな共同体と文化の一部たる再構築された家族、母と娘--セスとデン

ヴァーの両方が相互に関与できる刷新の一部たる再構築された家族の中に参画するために男が戻るのである。(1989,387)」としているハーシュのコメントも有効であろう。このようにして、自分の芸術家としてのアイデンティティを、母親と分離したり対立したところに定義づけている同時代の白人フェミニズム作家たちとは異なって、黒人女性作家たちは、「何世代にもわたる女たちの連なりの一部として自分自身を知覚する黒人女性作家たちの感覚と、書こうとするつながり(ハーシュ,1989,345)」の中で可能となる「母の声」の回復の場所を求めていったのではあるまいか。その回復の場は、西欧個人主義的な言説の中では「個」が誕生する踏み台として棄却され、アブジェクトされる母なる子宮がイメージされがちであり(クリステヴァの言うコーラ)、「子供」が成長していく必然的プロセスとして、発展、進歩、啓蒙といった近代を特徴づける線的時間の価値観の中で、乗り越えて突き進まなければ、稚拙、幼稚、退行してしまうような否定的な後退性として言説化されてしまいがちなものである。しかし、『ビラヴィド』の物語において喚起されている場というのは、そのような線的時間の価値観で一元的にはかることのできない別の時間、別の空間である。その場は、母的な子宮を個人主義的に言説化するエクリチュール・フェミニンの主体獲得の欲望の発露の区切り方をはるかに超えた、大きな時間的、空間的スケールでのパッチワークキルト的な繋ぎ合わせによって、初めて見たり、聞いたりすることが模索可能になるような別の認識の仕方を促す。墓石に刻まれたBelovedの文字を、石工の欲望のはけ口と交換に買われたただの文字としてしか読むことのできない読者から、血肉を与えられて回帰したビラヴィドが、「愛されなかった」物言わぬ身体性の記憶を生きているものに喚起し、被抑圧の重い過去を共有する民族の歴史意識から現実認識を変容させる責任を促す力を読みとることのできる読者に変容させることによって、『ビラヴィド』の物語は、マルチアクセンチュアルな声がコードをキーを言葉の壁を破って聞こえてくる。そのような別の知のあり方の中で、「男と女」の対話、「母と娘」の対話、「過去と現在」の対話など様々な声が多元的に読まれて初めて、抑圧された母の声を身体性の物語、過去の物語からの回復が可能になっていくのである。

(注)

1. Marianne Hirsch, *The Mother/Daughter Plot: Narrative, Psychoanalysis, Feminism* (Indiana U. P., 1989). 邦訳、寺沢みづほ『母と娘の物語』(東京:紀伊国屋書店、1992) ハーシュはその第五章「フェミニズムの声/母の声--二つの声で話す」において「大部分

娘の視点を採り続けているフェミニズムの著述や研究は、母親を**対象**の位置にすえていること--それゆえ自己表現と母親性との両立や母親の言説を理論的に不可能にさせ続けていること--によって、家父長制と共謀してい」て、「フェミニズムの言説と母親の言説を引き裂くものの正体を突きとめる精査によって、はじめてフェミニズム思想は解放され、母親の**主体性**の形を定義づけ、母親の声の意思表明を研究することができるようになるだろう。このようになった場合にのみ、両方とも主体である母**と**娘のフェミニズム家族物語--たがいの主体性を可能にする家族的、社会的コンテクストの中に生き、相互に語りあう家族物語--を構想できるようになる。(319-320)」と指摘している。ハーシュの分析は母親性が家父長制度の中で低い位置づけしか与えられていないうつろな機能だという感覚が、母親像を、男や家父長制度に束縛され続けているものという意味付けと直結させ、母親性が傷つきやすさやコントロール欠如、依存性と特徴づけられてしまうことへの不快感、女の身体性を生物学的本質主義と容易に結合させてしまう「身体に対する恐怖症」、あるいは怒りが、基本的に「娘の視点のフェミニズム」を採用し続けたフェミニズムが母親的なものを忌避すべきものとしてさらに抑圧するように加担していくことになったとしている。(下線部・太文字部筆者。以下、本文及び注の下線部・太文字部は全て筆者。)

2. Homi K. Bhabha, *The Location of Culture* (London & New York: Routledge, 1994), "Postcolonial Criticism," in *Redrawing the Boundaries,* eds. Stephen Greenblatt and Giles Gunn (New York: The Modern Language Association of America, 1992), pp. 437-465.
3. Paul Gilroy, *The Black Atlantic: Modernity and Double Consciousness* (Cambridge: Harvard U. P., 1993), p. 74.
4. Toni Morrison, *Beloved* (A Plume Book, 1987), p. 152.邦訳、吉田廸子『ビラブド』下、p. 38.以下、テクストからの引用は本文中に括弧書きで示す。
5. Deborah Ayer Sitter, "The Making of a Man: Dialogic Meaning in *Beloved*," in *African American Review,* vol. 26. no.1, (Spring, 1992), p. 29.の注17には、これまでの *Beloved* 批評史を要約して、'Beloved serves in at least three capacities in this novel: as the incarnated spirit of Sethe's murdered daughter; as an escaped slave who murdered her abusive master; and as the collective racial memory of the Middle Passage, in particular, and of the experience of slavery, in general.'としている。二番目の役割は、主に、Elizabeth B. House, "Toni Morrison's Ghost: The Beloved Who is not Beloved," in *Studies in American Fiction,* pp. 18-26.に負うところが大きい解釈であろうが、幽霊ではなく現実の娘に限定することで説明のつかない箇所が出てしまうように思う。特に、後に述べるように「死者との対話」を示す時間性、空間性を排除してしまうのではないか。しかし、House の「ビラビド＝(殺されたはずの娘の幽霊の帰還ではなく)現実の娘」説が一定程度、説得力を持ちうるのは、モリソンが奴隷制を過去の遺物として黒人コミュニティの記憶からも忘れ去られようとしている現代において、も

う一度、被抑圧民族の歴史を現実認識に関わる問題としておいて提起するような臨場感を読者に喚起させているからであろう。

6. Jean Wyatt, "Giving Body to the Word: The Maternal Symbolic in Toni Morrison's *Beloved*," in *PMLA*, 108 (1993), p. 482.

7. Interview with Morrison, published as "Living Memory: Meeting Toni Morrison," in Paul Gilroy, *Small Acts* (London: Serpent's Tail, 1993), pp. 175-182.

8. *The Black Book* の編集の仕事に携わっていた際に目にとまった記事に着想を得たというモリソンは、マーガレット・ガーナー事件自体を忠実に記すよりは、「彼女の人生を発明したかったのである」と述べている。〈Marsha Darling, "In the Realm of Responsibility: A Conversation with Toni Morrison," in *Conversations with Toni Morrison* (Jackson: U. P. of Mississippi, 1994), p. 248.〉 ここで、モリソンが史実それ自体ではなく、どのような「人生の発明」を書き加えて *Beloved* を変更させているのかが注目される。その事件に加えた変更のうちでも興味深い点は、セスと124番地は白人はもとより、黒人コミュニティからも孤立し、物心ついた二人の息子にも見捨てられ非難と悪意に満ちた状況の中で生きることを強いられていることである。もともとマーガレットと夫サイモンとの夫婦一緒の奴隷制への闘いであった事件が、身重のセスのたった一人の逃亡と抵抗の物語へと変更され、その状況が奴隷制廃止を前後して、解決に向かうのではなく、ベビー・サッグスの死によってセスの孤立状況が強調されるように変更されている。Davies の指摘によれば、*Beloved* のテクストは、「奴隷制下、自分の子供たちが奴隷制に奉仕する道具になるよりは、殺してしまうことを選ぶ黒人女性が多くいたという歴史的事実に依拠しているのである」という。〈Carole Boyce Davies, "Mother Right/Write Revisited: *Beloved* and *Dessa Rose* and the Construction of Motherhood in Black Women's Ficiton," in *Narrating Mothers: Theorizing Maternal Subjectivies,* eds. Brenda O. Dale & Maureen T. Reddy (Knoxville: The U. of Tennessee Press, 1991), p.45.〉 とすれば、子殺し事件を契機に孤立を深めるセスと123番地への変更は、黒人コミュニティの結束を損なわせていく仕掛けについて黒人コミュニティの側が無自覚で、人種的団結を喪失していくことへの警鐘としての物語構築が意図されているからではないか。奴隷制が存続していた時代も、廃止されてからも、黒人の側が自覚的でないために支配者側の論理に取り込まれていってしまう危機を、奴隷制が黒人の側からも過去のものとして忘れられがちな現在の現実認識の問題として問い直し、正しい歴史認識を喚起させる物語へと変更したのである。

9. Jennifer FitzGerald, "Selfhood and Community: Psychoanalysis and Discourse in *Beloved,*" in *Modern Fiction Studies,* vol. 39, no. 3&4 (1993), pp. 672.

10. Barbara Schapiro, "The Bonds of Love and the Boundaries of Self in Toni Morrison's *Beloved*," in *Contemporary Literature* vol. 32, no. 2, (Summer, 1991), p. 195.

11. セスの物語とポールDの物語の関係性において問い直されている問題は、自分の妻を、主人の息子に渡した時のスタンプ・ペイドの名付けの行為においても反復されている。妻

の身体を自分の所有物とする意識があるからこそ生じる主人の息子への「贈り物(184-185,下,98)」という発想から改名した「支払い済み」の名前が、実際には支払いの済んでいない負債をかかえているかもしれないことに、彼は気づいていく。自分の妻の肉体と交換に彼が発行するいわば譲渡証明書は、妻を所有物とみなす論理の域を超えていないことの証明である。このような'renaming'が表層的なものにすぎず、実際には、ご主人の価値観を模倣しているだけであるとすれば、ビラヴィドに導かれて「深海」に触れる儀式を経た後の'renaming'によって、真にルーツに回帰する可能性が生まれるものとイメージされているのではないか。

12. Marianne Hirsch, "Maternity and Rememory," in *Representations of Motherhood,* eds. Donna Bassin, Margaret Honey, and Meryle Mahrer Kaplan, (New Haven and London: Yale U. P., 1994), p.96.ハーシュの定義するところによれば、'Rememory is neither memory nor forgetting, but memory combined with (the threat of) repetition; it is neither noun nor verb, but both combined. Rememory is Morrison's attempt to re-conceive the memory of slavery, finding a way to re-member, and to do so *differently,* what an entire culture has been trying to repress. (italics, Hirsh; underlines, mine)

13. Deborah Horvitz, "Nameless Ghosts: Possession and Dispossession in *Beloved,*" in *Studies in American Fiction,* vol.17. no. 2.,p. 162.

14. Karin Luisa Badt, "The Roots of the Body in Toni Morrison: A Mater of 'Ancient Properties'", in *African American Review,* vol. 29, no. 4,(Winter, 1995), p. 568.

15. Stephanie A. Demetrakopoulos, "Maternal Bonds as Devourers of Women's Individuation in Toni Morrison's *Beloved,* in *African American Review,* vol. 26, no.1 (1992), pp. 51-59.

16. 黒人にとっての(特に黒人女性にとっての)エクリチュールの主体の座は、「白人=抑圧者側」/「黒人=被抑圧者側」の単純な二項対立の図式に当てはめ難くなってきている複雑化する現実にあって、"renaming"が支配者の価値観の模倣にすぎない陥いんに陥りやすく、「母の身体で生産し、再生産したはずのミルクが再び盗まれることになる危険に絶えず晒されていることへの問題意識なしには、獲得は不可能である。Anne E. Goldman も「母の身体で作られたインク」の傷つきやすさに注意を促している。〈"'I Made the Ink': (Literary) Production and Reproduction in *Dessa Rose* and *Beloved,*" in *Feminist Studies,* 16, no.2 (Summer 1990), pp. 313-330.〉母の主体性獲得の可能性は、ハーシュが指摘するとおり、エクリチュールと身体性の両次元で、真に対話的な関係が可能であるコンテクストにおいて初めて開かれているように思える。そのようなコンテクスト創りは現実レベルでは困難を極める時間性、空間性において語られてきた。しかし、困難なだけで、そのような歴史論理を超越した地平が創られる可能性がないわけではない。デンヴァーに託されているものこそ、未来に向けて希望をつなぐヴィジョンなのではあるまいか。

17. David Lawrence, "Fleshly Ghosts and Ghostly Flesh: The Word and the Body in *Beloved,*" in *Studies in American Fiction,* vol. 19. no. 2, (Autumn, 1991), p. 190.

18.「黒人男性＝レイピスト」神話のほかにも、ステレオタイプ化の脅威の例として白人の忠実な召使いとして主人の言いなりになる間抜けな「サンボ」イメージも書き込まれている。もっと広い世界へと生まれ変わろうとしたデンヴァーの目に入った「勝手口の脇についている棚の上に、座って、硬貨をいっぱいに入れた黒人の少年の口...少年が膝をついている台座には、[ご自由に使ってくんなせい] と書いてあった(255,下,232-233)」も、言語への権威を持った白人側に定義されていく危険を示唆していると言えよう。その他、テクストの随所に散りばめられている「口」は、支配者の言語秩序によって定義されたものとのずれ、フライデイの口の問題を喚起している。

19. 1892年に南部の諸州を中心にピークに達するリンチ事件は、黒人女性である Ida B. Wells が調査に乗り出して、新聞記事などを書いて真相を訴え、反リンチ運動を展開していくまでは、黒人たちの間ですら、「黒人男性＝レイピスト」神話が信じられていた。詳しくは、Paula Giddings, *When and Where I Enter: The Impact of Black Women on Race and Sex in America* (New York: Bantam Books, 1984), 邦訳、河地和子『アメリカ黒人女性解放史』(東京：時事通信社,1989), Paula Giddings, "The Last Taboo," in *Unequal Sisters: A Multicultural Reader in U. S. Women's History* (New York: Routledge, 1994), pp. 560-570.邦訳、和泉・勝方・佐々木・松本『差異に生きる姉妹たち』(東京：世織書房,1997), Jacquelyn Dowd Hall, *Revolt Against Chivalry: Jessie Daniel Ames and the Women's Campaign Against Lynching* (New York: Columbia U. P., 1974), Ida B. Wells, *Crusade For Justice: The Autobiography of Ida B. Wells* (Chicago: The U. of Chicago P., 1970)等を参照のこと。

20. 黒人コミュニティが被抑圧の歴史を忘却し、民族的団結を損なうようになる階級的差異（中産階級的価値観を身につけて白人化していこうとする黒人中産階級層の出現）の問題、黒人内部のジェンダーの問題などは『青い眼がほしい』などの作品の中心テーマである。また、母性愛がそもそも「自然な本能」の発露であるかのように扱われることの反証として、例えば、『青い眼がほしい』では、自分の子供よりも女中として仕えている白人中産階級の白人娘の方に愛情を注ぐ Pauline Breedlove がいるし、茶色の肌を持ち、真っ黒な人々を侮辱して猫が最大の愛着対象である Jeraldin に描写される母親像では、母親とは自分の子供に無条件で献身する本能を持つものであるとの母性愛イデオロギーを敢えて覆している。『スーラ』に到っては、もはや奴隷制に原因を帰着させることのできない子殺しが Eva の手によっていとも簡単になされていて、セスの子殺しが事件として大々的なニュースとなって報じられ処罰を受けたのと好対照である。

21. 聴力を失った二年間を過ごしたデンヴァーは、通常の域を超えた視力を与えられ「カーディナル(血の色をした点)が、小さな枝から大きな枝に飛び移る(101,上,197)」のさえ見えるようになる。「血のように赤い小鳥(134,下,4)」と後でも繰り返される「赤い色」のメタファーは、被抑圧の象徴としての「血が混じったエクリチュール」から、別の認識

の仕方を学び取って歴史を変容させていくような未来を築いていく潜在能力をデンヴァーに託している場でもあろう。聴力を失うきっかけとなったネルソン・ロードの言葉を、後にデンヴァーは違うニュアンスで聞き分けている。「自分を大切にね、デンヴァー」との声が「まるでこの一言のために言語がつくられたように、響いた(252,下,227)」と受け止められ、彼女は同じ言語の壁の裏側から響くマルチアクセンチュアルな発話の声を聞き分ける読者へと変容を遂げていることがわかる。